

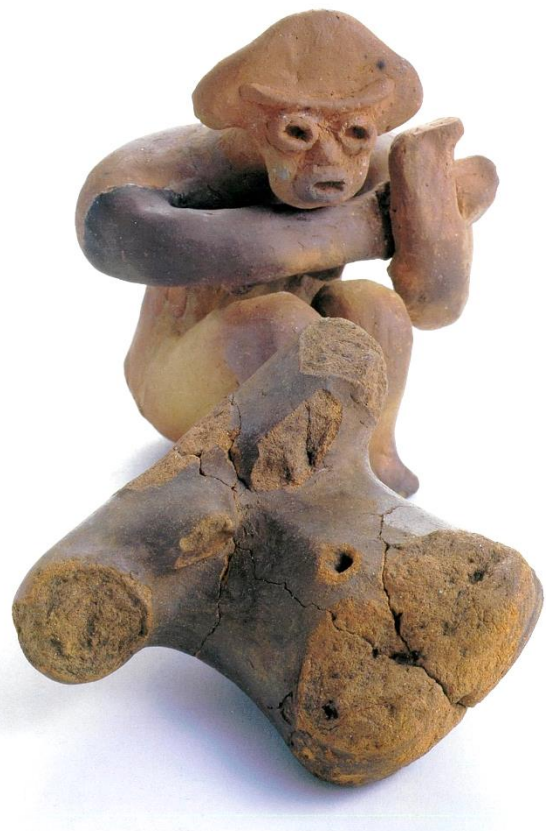
常識をくつがえす東北地方の土偶を発見 下山遺跡（飯南町）

調査年：1996（平成8）年

深田 浩

今から 26 年前の暑い夏、志津見ダム建設予定地内の発掘調査担当者だった私は、神戸川を見下ろす丘陵で、この地域特有の“黒ボク”と呼ばれる厚い黒色土層を掘り下げていました。縄文土器が出土し始め、そろそろ三瓶山の火山灰層（約 3,700 年前）に達するのを注意深く見守っていた時、作業員から「何かへんなものが出ました！」と呼び止められました。慌てて駆けつけたところ、これまで見たこともない粘土の塊がそこに横たわっていました。（こ、これは普通の縄文土器じゃないぞ）と、はやる気持ちを抑えゆっくり取り上げて裏返してみたところ、頭部や両手足は欠損していましたが、明らかに妊婦像とわかる張り出した腹部や乳房がはっきりと見て取れました。想像さえしていなかった土偶の胴体部を発見したときの興奮を今でも覚えています。

土偶は縄文時代の遺物の中で、最もポピュラーなものといえます。ところが、我々が“縄文ビーナス”としてイメージする豊満な女性像を現した土偶や、幾何学的で芸術性の高い遮光器（しゃこうき）土偶はそのほとんどが東日本で作られたもので、西日本は出土数も希薄で装飾性に乏しいことが当時の常識でした。中でも島根県は土偶の出土例が極端に少なかった地域でありわずか 3 遺跡で 4 点ほ



下山遺跡出土土偶（手前）とその復元品（奥）

ど。土偶の形態は総じて小型の板状品で頭部や四肢が省略され、かろうじて胸部に乳房が突起により表現されているものがほとんどでした。

ところがこの土偶は大きさが 10cm 以上あり、四肢の剥離面から座して手足を屈曲させ何らかのポーズをとる特殊な土偶で、これに類似する土偶は福島県上岡遺跡で出土していることがわかりました（しゃがむ土偶として国の重要文化財に指定）。従ってこの土偶は東北地方から運び込まれた可能性が高く、縄文人の広域に及ぶ交流の姿を物語るものとして当時新聞にも大きく取り上げられ、全国的にも大きな注目を集めました。

この発見後島根県内でも多数の縄文時代遺跡が調査され、土偶の発見も相次ぎました。現在のところ出土数は 11 遺跡で 24 点を数え、当地域における土偶祭祀の実態も明らかになりつつあります。しかし、遠隔地からの搬入品とみられるものはこの土偶以外に例は無く、極めて特異な現象であることがうかがえます。今日、この土偶の発見から四半世紀が過ぎましたが、一体いつ、誰が、何の目的でどうやって遺跡に運び込んだのかは、未だに謎のままです。

（島根県埋蔵文化財調査センター管理課長）

【ひとくち情報】

現在、この土偶は古代出雲歴史博物館の総合展示室にて展示されており、並んでいる他遺跡出土の土偶と比べることで、この土偶の特殊さを実感できる。